

地域づくり交流会 in 室蘭

「関係人口の創出・拡大」開催内容

1. 日時：令和6年10月1日（火） 14：30～16：30
2. 場所：室蘭開発建設部 1階大会議室（室蘭市入江町1番地14）
3. 基調講演
 講演タイトル：つながりが生み出すこれからの地域づくり
 ～関係人口の創出による人と地域の変化～
 講師：NPO 法人 ezorock 代表理事 草野 竹史 氏

4. パネルディスカッション：

役割	所属	役職	氏名（敬称略）
パネリスト	一般社団法人 噴火湾とようら観光協会	事務局長	岡本 貴光
パネリスト	NPO 法人 ezorock	代表理事	草野 竹史
パネリスト	NPO 法人有珠山周辺地域 ジオパーク友の会	事務局長	三松 靖志
パネリスト	一般社団法人 SHIRAOI PROJECTS	代表理事	山岸 奈津子
ファシリテーター	公益財団法人はまなす財団	地域経営 アドバイザー	小倉 龍生

5. 参加者：46名
 関係者：15名
 報道機関：2社

6. 交流会の要旨

(1) 基調講演

つながりが生み出すこれからの地域づくり
～関係人口の創出による人と地域の変化～
NPO 法人 ezorock
代表理事 草野 竹史 氏

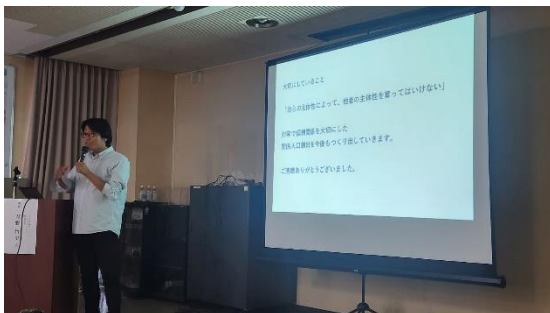


- NPO 法人 ezorock は、ライジングサンロックフェスティバルのゴミ問題を解決する大学生のサークル活動が原点です。その活動を通して、若者を集める

力とコーディネートするノウハウを蓄積してきました。そこから派生し、まちづくりや環境保全、災害支援の事業なども実施しています。

- 関係人口という言葉は、2017年くらいから色々なところで使われるようになりました。定住人口というと、地域同士で人の奪い合いになってしましますが、関係人口の場合は、一人の方が複数のまちに関わることができます。ezorockでは、札幌から北海道各地に若者を20年ほど送り出しており、結果的に関係人口構築に貢献していたんだと思いました。会員は約400人、年間300回程度の地域づくりの現場があり、ボランティアで年間約2,000人日のマンパワーを送り込んでいます。周りから、地域づくりの現場に行きたい若者が、なぜそんなにたくさんいるのかとよく聞かれます。その理由は、今の若者が自分の居場所や第二の故郷、自分が役に立てる場所を探しているからではないかなと思っています。
- 関係人口は、ちょっとしたお手伝いや表面的な関係性では地域のマンパワーにはならず、受け入れ地域側の負担になっていることが少なくありません。北海道だけでなく、全国的にそれらの動きが問題視されています。
- 私たちは、本当に地域のためになっているか、ということ意識して活動しています。具体的には、石狩市の浜益区の事例を紹介します。浜益は札幌から車で約1時間半、人口約1,000人、高齢化率約60%と、かなり過疎化が進んでいる地域です。この地域とは、10年以上関わりを持ち、予算があってもなくても関わり続け、地域の果樹園のサクランボを使った商品開発や、大雨の災害があった際に会員自ら現地に訪問したり、コロナ禍に地域の農家さんからお米を若者のために安く提供してもらって配ったりと、ピンチの時こそ支え合い、対等な関係性を構築しています。こうして地域に関わり続けた結果、地域おこし協力隊として移住する若者も出てきています。
- 私たちは、「自らの主体性によって他者の主体性を奪ってはいけない」ということを団体のポリシーにしています。関係人口創出における重要なポイントは、外から地域に入って課題を解決するようなスタンスではなく、学ばせてもらうようなスタンスで地域と関わり、お互いに相談し合えるような信頼関係を構築することだと考えています。

(2) パネルディスカッション



活動紹介 一般社団法人噴火湾とようら観光協会 事務局長 岡本 貴光 氏



- 一般社団法人噴火湾とようら観光協会の観光戦略の基本は、「観光地づくり」ではなく、「観光地域づくり」ということを住民の方に示しており、各産業と自然、歴史、文化、暮らし、まちの様々なものに関連づけて、地域全体を活性化する手段としての観光を目指しています。地域経済活性化という観点では、人口減少がもたらす経済的な負の影響を観光振興でカバーすることと、住民が地域に対する誇りや郷土愛を醸成する取組を重要視しています。
- 私が手掛けている事業は、大きく2つ。1つ目は、TOYOURA 世界ホタテ釣り選手権大会です。地域の官民含めた20代から40代の若者30名程度が主体となり、「世界ホタテ釣り協会」という団体を立ち上げ、ホタテ釣りの世界大会を実施しています。公式ルールを決め、毎年3月に個人戦を開催するほか、団体戦やジュニア大会、体験版として全国各地へのイベント出張や、教育旅行・インバウンド・インセンティブツアー向けの体験プログラムなどを行っています。この活動が評価され、スポーツ庁・文化庁・観光庁の3庁連携で開催された「スポーツ文化ツーリズムアワード2020」において、特別賞を受賞しています。
- 2つ目は、海産総選挙です。地域資源の豊かさを全国に発信し、町民の郷土に対する誇りや愛着を醸成することを目的としています。衆議院議員総選挙のタイミングに合わせ、豊浦で獲れる海産物の人気投票を行います。2017年に開催した1回目は2,454票、2021年に開催した2回目は25,175票集まり、両方ともホタテがトップ当選しました。メディアにも多く取り上げられ、X（旧 Twitter）でも、動画が10万回再生を超えるなど、大きなPRとなり、観光協会のHPアクセス数の大幅増加、通販やドライブスルー販売のホタテも完売するなど、たくさんの良い影響が出ました。今後に向けて横展開も検討しており、そのために商標登録も行いました。
- これらの取組に、町民からの喜びの声が観光協会にも寄せられ、地域資源を活用して郷土に対する誇りと愛着を醸成することができました。

活動紹介 NPO 法人有珠山周辺地域ジオパーク友の会 事務局長 三松 靖志 氏



- NPO 法人有珠山周辺地域ジオパーク友の会は、有珠山という地域資源を守りながら楽しもう、という会です。活動内容は、オロフレの樹氷ツアーや散策会などの社会教育事業、地域のごみ拾いや草刈りなどのまちづくり推進事業、20~30年に1回噴火する有珠山の防災について学びながら登山を楽しむ火山防災啓発事業、他のジオパークとの交流やガイドの育成、などを行っています。会員数は、当初は20人ほどからスタートしましたが、現在は206名ほどおります。

- 最も力を入れている事業は、防災学習です。あえて子どもたちを危険な山に登らせ、手で触って火山の熱に触れ、硫黄の臭いを感じ、次の噴火に備えることを啓発しています。私たちの活動を通して一番伝えたいことは、減災文化の伝承です。過去4回の噴火における直接被害で誰も亡くなっていないのは、事前に住民が勉強して、噴火に備えているからだと思います。
- 社会教育事業では、国道の景観保全のため、高山植物の保護や、ジオサイトの枝打ちなどを行っております。クルミの枝は登山用の杖として観光客に無料で貸し出し、山ブドウの皮を編んでカゴにして販売するなど、資源・経済が循環する事業となっています。
- 他のジオパークのガイドとの交流や育成も行っており、それらの活動が認められ、今年度は日本ジオパークネットワークから全国表彰も受けました。洞爺湖有珠火山マイスターというガイドと防災の認定制度があり、その養成講座を行い、会員から続々と合格者を輩出し、減災文化の伝道者を育成しています。当団体は、地球や自然という共通項に、老若男女問わず、多様性と適度な距離感を持ってつながる、関係人口そのものです。

活動紹介 一般社団法人 SHIRAOI PROJECTS

代表理事 山岸 奈津子 氏



- 一般社団法人 SHIRAOI PROJECTS は、「可能性を拓ける舟を出す」というキャッチコピーで、白老の可能性をいかに広げられるか、という気持ちで事業を展開しています。白老港を拠点とした魅力づくりや、「百舟」というフリーペーパーの刊行、アートプロジェクト、行政などと連携した企画・広報を行っています。
- 海という資源の有効活用やウポポイから人の流れを作ること、地域の収入を上げることを目的に、白老町や室蘭開発建設部と連携し、「シン・白老港」という魅力づくりのプロジェクトを行っています。具体的には、海の家を港の中にある海岸エリアで5日間開設し、SUPの体験会や、キッチンカーの誘致などを実施し、白老の海を楽しむ空間を提供しました。その結果、750名が来場し、こんな場所を求めていた、と大きな反響がありました。
- また、「あぶりのアーティスト・イン・レジデンス」という、アーティストを各地域に1人ずつ招へいし、製作滞在を実施するプロジェクトを行っています。胆振地域は、産業が多様で共通のストーリーが描きづらい地域でしたが、アートという違うレイヤーを地域に被せることで、連携の可能性を模索しています。現在、白老、苫小牧、室蘭、登別の4市町で実施しており、アーティストが滞在生活をしている最中です。この活動を通して、地域とアーティスト、アーティスト同士がつながり、関係人口の創出や新しいコンテンツが生まれるきっかけとなることを期待しています。
- 今まさに動きながら実証しているところですが、簡単にいかないことを実感しています。関係人口は、最終的には人と人とのつながりでしかなく、うまく相乗効果を生み出していくのが課題だと思っています。

関係人口構築に向けたヒントを探る

(草野氏) ezorock についての説明会を月に 2 回行っており、1 回に 200 名以上参加します。参加している方は意外と社会人の方が多いです。なぜかという、都市部において、家と職場以外で社会参画をする場所が減り、居心地の良いコミュニティや自分が役に立つ場所を探している人が増加しているからでは、と考えています。大事なポイントは、入口を広くして誰でも関わるができる体制づくりと、2 回目に参加してもらえよう仕掛けることです。1 回目は体験、2 回目から関係人口になるのではないかと思います。

(岡本氏) 世界ホタテ釣り選手権は、元々、商工会青年部で立ち上げた事業で、だんだんと規模が拡大して、世界ホタテ釣り協会という団体となり、社会福祉協議会や役場職員など、商工会のメンバー以外の参画が増えました。間口を広げたことと、日頃の間人関係の構築がポイントかと思っています。

(三松氏) 有珠山周辺地域ジオパーク友の会は、連絡はメーリングリストのみで、頻繁に交流があるわけではないですが、イベントの際は団結力を発揮します。ある意味メリハリのある活動になっています。会員のそれぞれの生活がある中で、過度に干渉し過ぎず、適度な距離感を作っていることがポイントなのではないかと思っています。

(山岸氏) 自分自身が元々白老の関係人口だったこともあり、よそから来た人間として自分のエゴにならないように、地域が喜んでくれる、納得してもらえる関係性づくりができるかを意識しています。関係人口だからといってガツガツ地域に入るのではなく、地域に住んでいる人々をリスペクトしながら活動することが重要だと思っています。

(草野氏) 地域で活動する際、地域側の窓口の担当者と、地域へ送る側の窓口を必ず整備します。若者が地域に入ると、寝泊りや活動場所への移動など、必ずフォローが必要な場面がありますが、それらを地域に丸投げせず、コーディネートする必要があります。また、課題解決を前提としたスタンスで地域に入ると、ヒアリングで地域の方々の時間と労力を奪うこととなります。こういった地域の負担をなるべく軽減することが重要かと思っています。

民間と行政の連携方策を探る

(岡本氏) 行政でも数年間働いていましたが、スピード感がネックでした。民間である観光協会は、素早い経営判断ができるため、そこが強みだと思います。観光協会には、役場の立場ではやりづらい、かゆいところに手が届く役割が求められているのではないかと思います。苦手な部分をフォローしながら、お互いにまちづくりをしていくことが必要かと思っています。

(草野氏) 民間も行政も、自分達が全てをやろうとしないことが大事なのではないかと思っています。浜益区の事例では、市職員も予算も少ない中で、今後の方針づくりから入っています。大学生のインターンの受け入れなど、タッグを組んで任せられるものは民間に任せるような役割分担が必要です。

(三松氏) 草野さんのお話に共感します。行政だけで何かをやろうとしても無理です。行政側と住民側で、お互いに壁を作ることが、人口減少社会においては非常に大きな足かせになると感じています。NPO の事務局長と行政職員を兼務して感じるの

は、住民側の立場に進んで身を投じることで、官民の潤滑油となり、お互いが活動しやすくなるのではと考えています。

(山岸氏) 岡本さんと近い考え方をしており、一般社団法人 SHIRAOI PROJECTS は、行政側が手の届かない部分をカバーしたいという思いで非営利としました。行政が白老港に海の家を開こうと思ったら難しいですが、海を家のイベントでは、普段使えない海岸を行政側で解放してくれ、そういった事例を連携してつくることができ良かったと思います。三松さんの昭和金山にしても、草野さんの浜益区にしても、シンボリックな場所があると人が集まりやすいです。行政側で、そういった場を開放したり、利用しやすくしてくれたりすることで、新しい何かが生まれるきっかけとなったのではないのかと思います。

10年後を見据えた取り組みたいこと

(岡本氏) 10年後を見据え、2点やりたいことがあります。1点目は、町内の小中学校での授業協力をしていきたいです。子供のうちから、地域に対する誇りと愛着を醸成していきたいです。2つ目は、海産総選挙の全国展開です。商標登録もしたため、小選挙区制などで実施したり、物産展やサミットを実施したりなど、横展開していきたいです。

(草野氏) 札幌近郊に若者が集中しているのが現状のため、集まってきた若者を地方に送り出す機能を作らなくてはいけないと考えています。また、コミュニティを維持するには、皆さんのちょっとした時間を集めることによって成り立っているもので、それぞれが地域に参画する時間を増やすような取組をすることが必要なのでは、と思っています。

(三松氏) 今、草野さんも話していましたが、温故知新の考え方が必要だと思います。チャットツールの既読スルーなど、便利になった反面、不安も増えているのでは、と思っています。循環型社会と近年では言われていますが、江戸時代は、わらじを擦り切れるまで履いたら堆肥にしていました。そのような考え方で、時代は変わるけれども、昔の良いものを見返して今の時代へ繋げていきたいです。

(山岸氏) 経済的な部分では、海を家の事業を拡大して行って、釧路のフィッシャーマンズワークのような、海産物を販売するような経済循環をつくり、ウポポイに匹敵するくらい人を集められるようにしていきたいと思います。文化的な部分では、アーティスト・イン・レジデンスの事業を拡大し、それぞれの地域で見えていなかった魅力を発掘するなどし、胆振地域が色々なことが起きて行って、おもしろいものが出来ていったら良いと思っています。

